



こころ

あるお話

スクールカウンセラー

吉澤克彦

令和2年12月



こんな話があります。少し昔の話ですが、本当の話です。

事故でお父さんが急に亡くなった家がありました。お母さんと男の子2人が残されました。生活がとても苦しくなりました。お母さんは、毎日朝早くから夜遅くまで必死に働きました。食事はお兄さんが作りました。しかし、生活はよくなりず、もっと苦しくなってきました。疲れ果てたお母さんは、あんまり苦しくて、年が押し迫ったある日、死んでしまおうと決めたのです。

その朝早く、お母さんは、せめて最後のご飯はおいしいものかと思ひ、鍋に豆を入れて水に浸して、その豆の煮方を書いた手紙を置いて、まだ暗い中、最後の仕事に出ていきました。

その夜遅く仕事から帰ってきました。もう、子どもは寝ていました。死を決意したお母さんは、子どもたちをじっと見つめます。お母さんの目から涙がぽとぽと落ちました。ふと、お兄さんの枕元の手紙に気がつきました。「お母さんへ」と書いてあります。手紙を読みました。

「お母さん、ぼくは中学校から戻りすぐに一生懸命豆を煮ました。でも弟は、しょっぱいと言って、ご飯に水をかけて食べて寝てしまいました。本当にごめんなさい。お母さん、お願いです。ぼくの煮た豆を一粒食べてみてください。そして明日の朝、もう一度、豆の煮方を教えてください。いくら早くてもいいから起こしてください。お母さん、ご苦労様でした。先に寝ます。」

中1の長男からの手紙でした。お母さんは、声を出さずに泣きました。そして、死ぬことをやめようと決めたのです。

朝、お母さんは長男と一緒においしい煮豆をつくりました。小3の弟はおいしいおいしいと言って食べました。煮豆だけのおかずでも、それはそれは温かく明るい食事でした。お母さんは、長男の手紙に豆を一粒包んで、肌身離さず持ち歩きました。それがあれば、どんなに苦しくても元気になれたからです。

コラム：上に書いた話は、佐野収五さん（故人）が、中学校長を退職された際の退職記念誌「邂逅」に掲載されていて、その中で、昔新聞で読んだ話として紹介されています。

なお、調べていくと今回紹介した類似の話は、方々で語り継がれています。

子どもの学年が違ったり、他のエピソードが追加されていたり、事故や生活について少し詳しい描写があったり、後日談が添えられていたりします。

さて、中学生高校生のみなさん、みなさんの姿ほど、家族を元気にするものはありません。年末年始は健康に過ごし、家族の一員としてお手伝いもしてください。勉強も大事です、部活動も大切です、それに加えて家族団欒、お手伝いなど、家族の一員としての役割を担ってください。

そして、悩みがあったら、苦しかったら、悲しかったら、怒りに震えることがあったら、いつでも遠慮なく打ち明けて下さい。